

# 南十字星

発行者  
クイーンズランド  
補習授業校  
校長  
丸山吉信

## 国語感想文 「蟬の声」

戦後七十年の今年、オーストラリアのテレビでも、広島、長崎の原爆の日、十五日の終戦記念日の日本の様子が放映されていました。

戦争を知らない世代の中学生、しかもオーストラリアにいる中学生は、浅田次郎作「蟬の声」をどのように読んでいるのでしょうか。中三の感想文をいくつか紹介します。

森みのり

「戦争とはなんだろう」というのが、この物語に隠された数多いテーマのひとつだろう。戦争を体験したことのない私達には、人がたくさん殺される国同士の争いだということくらいしかわからない。しかし、和男との会話を通して、祖父は、戦争がいかに残酷で、惨めで、切ないかを語っている。「戦争には勝ちも負けもないんだ。戦争をするやつらは、みんな負けさ。」と物語の中で祖父は和男にこう論じていた。これは、まさに戦争の心理だ

と思った。兵器や武器を作ることばかり金をかけ、関係のない人達まで貧困に追い込み、終わった後には何も残らない。そんな争いに一歩でも足を踏み入れた時点で負けだも同然なのだ。この作品から学べることはとても多い。何よりも、「戦争は結局何も生まみ出さない」というメッセージに込められた作者の強い思いが文章を通して伝わってきた。改めて、戦争の無意味さを思い知らされた作品だった。

張 晟洋

元々、第二次世界大戦に少々興味を持っていた自分にとって、この話は勉強になったと同時に、とても考え深いものだった。少年時代を陸軍士官学校に合格するために全てを費やし、そして、世界を敵に回して日本という国のために命をかけて戦った。だが、最後はこてんぱんに負け、しまいには、核爆弾を母国に落とされてしまった。このような人生を乗り越えてきた「じいちゃん」の出した答えはこうだった。

「戦争をしたやつはみんな負け。」  
本当に、その通りだと思った。本当の意味での戦争を知らない、戦争の恐怖を味わったことも、それを想像することすらできない自分でも共感できているのだ。決して間違ったことではないと強く思う。



鈴木海友

これは、来年高考生になる和男と、いくつもの老人ホームを見て回っている、近々九十歳になるおじいちゃんのお話です。「カズは来年、高校だな。」というおじいちゃんの一言からおじいちゃんの昔話になります。

おじいちゃんの幼い頃、男子は全員陸軍将校か海軍士官になりたかったというのに驚きました。教科書にも綴られているように、子供達の夢はそれぞれ自由でなければならぬ、と私も思います。

当時、日本は強かったが、腕っぷし

ばかりで中身がなかった。中国と戦いはじめ、最後には原爆を落とされて負けました。それに対し、おじいちゃんはどう言った。「戦争には勝ちも負けもないんだ。戦争するやつらはみんな負けさ。」

確かにそうだと思います。戦争でいくつの尊い命が奪われたか。そう考えれば納得がいくだろう。おじいちゃん、は、いくつもの素晴らしい発言をしていると思いました。

宇佐美龍太

和男のおじいさんは、九十才なのに自分のことを全部やろうとしていて、すごいと思う。洗濯、アイロンかけから自分の老人ホーム探しまで和男のお父さんに迷惑をかけないようにしている。僕だったら「もう九十才だから、みんなやって下さい。」と言って、自分で何もやらないと思う。

おじいさんは、和男だけに苦しい戦争の話をしてくれた。友人達は、食べ物もないシベリアや中国大陸や孤島で手足の先から凍って死んでしまった。平和が一番だと教えたくて、和男という名前をつけて、自分の思いを伝えたかった。おじいさんの頭の中は、いつまでたっても、戦争の苦しみから

抜け出せないでいるのだ。

おじいさんはどうして和男だけに戦争の話をしたのだろうか。どうして和男のお父さんに迷惑をかけたくないのだろうか。僕はまだよくわからない。

田底 芽

むしむしと暑い夏の日を思わせるタイトル、「蟬の声」。特に特別な思いもなく、「まあ、教科書の中の読書教材だし。」と軽い気持ちで読み始めた私はすぐにその考えが間違っていたことを思い知らされる。

九十になる父に付き添いながら、父母には内緒で老人ホームを探す手伝いをしていた和男は自分の高校受験の話から祖父が陸軍士官学校に通っていたことを聞く。戦争で陸軍将校として戦っていたときの過去や戦争、戦友への思いを祖父は和男に初めて語りだしたのであった。

陸軍士官学校のことを和男に聞かれたとき、「祖父は叱りつけるような目で和男を見下ろした」という表現で書かれている。この部分を読んだときに、私はギロツとした、しわで隠れかけた祖父の目が和男を睨みつけている絵が浮かんできた。和男がその行動

に戸惑ったように、私もなぜ祖父が和男を睨みつけたのかよくわからなかったが、祖父の過去、戦争の現実を知り、考え直してみると、「お前にこの過去を受け止めて、ちゃんと考えることができるのか」という彼への問い、または、過去を思い出す恐ろしさゆえの叱りつけるような目になったか、どちらかなのではないかと思った。いざれにせよ、陸士の後に続く祖父の過去は、思い出してみて、あまりいい記憶ではないのだな、ということはその先の話を読む前の私にも十分に感じられた。

陸軍士官学校の後、陸軍将校になつて戦い、日本がこてんぱんに負けた話をした後、祖父は戦争で苦しんで死んだ士官学校の友人の一人一人の最後、彼らが死ぬ前に何を考えていたのだろうかと考えることがあると語る場面があった。私は本を持っている手がしびれるような感覚になった。戦争や辛い歴史から常に目を背けてきた私には、九十歳のおじいちゃんが戦後七十年以上もこの過去に縛られ、苦しめられていたという事実は少し重すぎたと思う。祖母の死のときも泣かなかった祖父が唇を震わせて泣いていた、と書いてあった。戦争が若かりし彼の

心にどれだけの傷を負わせたのかを感じさせられた。死と隣り合わせで戦争中生きてきた祖父の辛さは、私には計り知れないと思う。胸が苦しくなるような、目頭が熱くなるような、戦争を始めた奴らを殴ってやりたい、という怒りが私の中にこみ上げてきたのを感じた。

次の世代を背負っていく私たちは、過去の過ちから学ばねばならない。戦争なんて起こしてはいけない、と改めて思った。戦争が計り知れない苦しみと悲しみを祖父の中に、戦争にかかわったすべての国にもたらした事実を痛感した。そして、このたった六ページの教科書の読書教材からこんなにも考えさせられ、学べることができるのだと少し驚いた。改めて、教科書の読書教材の必要性和大切さも思い知らされた気がする。

## お知らせ

(一) 九月十二日が今年度の文集原稿締切日になっていきます。テーマや原稿用紙について担任からの指示がある場合にはそれに従って下さい。特別な指示がない場合には、「将来の夢」または「補習校の思い出」と題して、ホームページにある学年別の「あおぞら」

用原稿用紙に書いて下さい。

用紙は一枚が原則ですが、二枚になっても構いません。ただし、二枚になる場合には、二枚目の右下欄外に氏名と二枚目であることを明記してください。

また、今年は、氏名の上に出席番号を記入して下さい。

原稿は文字によるものを原則とします。挿絵を添えることは可能ですが、写真を添えることは禁止です。

提出は一作品だけです。一人で二点以上の提出をしないで下さい。

(二) 補習校への携行品について以下の通りお願い致します。

① iPad を含めて、授業に関係のないものは持ってこない。

② 携帯電話は持って来てもよいが、登校後、下校時迄は各自かばんの中に入れておき、使用しない。

## 今後の予定

十月二十四日まで

・教育相談

九月十二日 ・文集原稿締切(幼稚部

は十一月七日)

九月十九日 ・第二学期終業式

・成績通知表配布